研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書,学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所,発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概　　要
(著書(欧文))				
(著書(和文)) 1. 養護教諭実務全集	共著	1995年12月	小学館プロダクション	養護教諭実務全集は,①保健室経営,②学校環境衛生,③健康診断,④応急処置,⑤保健指導,⑥保健情報で構成され,全6巻が出版された。そのうちの④応急処置,第6章心肺蘇生法を分担執筆した（P183～200）。養護教諭の執務において,学校救急看護は基本的かつ重要な役割の一つである。学校における応急処置の意義や必要性,応急処置の範囲と限界を示すとともに,傷病や急病時の連絡体制と事後措置の在り方について記した。また,心肺蘇生法の手順などの基本的事項を示すとともに実践事例を紹介し,養護教諭の具体的活動や注意すべき点を明示した（国崎弘,石川哲也監修）。
2. 体と心 保健総合大百科	共著	2022年4月	少年写真新聞社	体と心 保健総合大百科は,2020年に発行した「高校保健ニュース」の指導用解説紙面や保健指導資料等を縮刷し,保存・活用版としてまとめたものである。「高校生の心のテーマと心理教育および健康相談」として,高校生の発達段階と心理的課題,養護教諭の行う健康相談,学校内組織や専門機関における連携,医療的危機介入等,実践活動の解説や保健指導資料がおさめられた（P170～171,少年写真新聞社編集）。
(学術論文(欧文))				
(学術論文(和文)) 1. 12年間の高等学校における精神保健活動の分析－連携と個別支援の観点から―（査読付き）	共著	2011年8月	学校保健研究第53巻,第3号,P232～240	公立の高等学校に精神科医師が学校医として配置され,保健室で展開された学校精神保健活動を分析し,児童思春期を専門とする精神科医参画の成果と意義を検討した。専門医が学校医として着任し,教員に認知されたことで保健室がセンター的な役割を果たし,情報が集まりやすくなったことが示された。精神科医との協働作業では,子どもの精神的な発達と人格形成に関する考え方,心の健康の概念や社会的適応の意味等,人間の成長を多角的に捉える視点が学校関係者に必要であった。12年間に及ぶ組織的な精神保健活動は,医療と教育の連携を模索する試みであり,自殺予防の観点からも一定の成果が得られた。 担当部分：全文執筆（海老澤恭子,大野建樹）

2. 高等学校における健康相談事例のICD－10分類 （査読付き）	単著	2011年12月	学校保健研究第53巻,第5号,P419～428	養護教諭が実施した高校生の健康相談380例を分析対象とし,その特徴について検討した。相談者の性別・学年別で有意差が認められ,相談者は男子より女子に多く,学年が上がるごとに増え,年間を通して相談月に有意な偏りがあった。主訴は身体不調が59.7%,精神的悩みが23.4%であるが, ICD-10分類による医学的診断では,身体疾患は23.4%,精神および行動の障害は76.8%であり,身体の不調を訴えつつ,背景にはメンタルな問題を抱えていることが明らかになった。これらは,養護教諭が身体症状をとらえて判断することの難しさを示唆していた。生徒の悩みは新学期,定期考査,学校行事,大学受験等,修学上のスケジュールによって影響を受けると推察された。多くの生徒が数回のサポートで学校生活に順応していけるのに対し,統合失調症,躁病,社会恐怖症等の病態を抱えた事例は,より多くの相談回数を要することが示された。
3. 高校生の摂食障害33事例の実態 （査読付き）	単著	2012 年12月	学校保健研究第54巻,第5号,P412～417	養護教諭が実施した高校生の健康相談事例のうち,33例の摂食障害を対象に分析と考察を加えた。このうち,神経性食思不振症18例を体重減少の程度と期間で2群に分け,統計的検定を加えて2群間の比較検討をした。全体徴候として低体温,除脈,低血圧が認められたが,柑皮症,毛髪脱落,産毛密生等は,体重減少勾配が大きいほどより顕著にみられた。神経性食思不振症の身体症状の出現は,体重減少勾配と関連することが推測され,フィジカルアセスメントによって体重減少の予測ができ,疾患の重症度の把握に有用であることが示唆された。このことは,養護教諭にとって身体管理の指針となり,身体症状の意味を生徒にフィードバックすることによって,専門医受診へと導く二次予防が可能になることが示された。
4. 高等学校における教員の行う保護者面接－保護者の求める面接とは― （査読付き）	単著	2014年	日本健康相談活動学会誌Vol.9,No.1,P19～30	教員および保護者を対象に質問紙調査を実施し,保護者面接の実態を明らかにした。自由記述データは数量化して扱い,J.S.Houseによるソーシャルサポートの定義を援用して分類した結果,面接を行う教員の年齢が高くなるほど,情緒的サポート,評価的サポートを多く用いていた。保護者は,教員から情報的サポートと道具的サポートが得られた面接において満足度が高かった。これらのことから,教員の行う面接の実態は,傾聴を主とした情緒的サポートによって保護者との良好な関係を築きつつ,生徒の具体的情報や評価を発信していることが明らかになった。保護者の立場からは,教員との信頼関係を前提とした援助のニーズが明らかになった。

5. 高校生の防衛機制とアタッチメント―学力偏差値と保護者の社会的経済的地位との関連― （査読付き）	単著	2018年	日本思春期青年期精神医学・JSAPP Vol.28,No.2,P130～140	思春期関連の研究では,精神病理的な問題を抱える生徒が対象にされることが多いが,本研究では,健常とされる高校生の性格や行動特性について,心理尺度を用いて評価し,理解することを試みた。DSQ42,RQの心理尺度を用いて,防衛スタイル,アタッチメントスタイル,学力偏差値,社会的経済的地位の関連を検討するため,Mann-Whitney検定, t 検定,三元配置の分散分析の統計的検定を行った。学力偏差値高群の保護者の社会的経済的地位は低群に比べて高く,アタッチメントスタイル別における社会的経済的地位の分布に有意差はなかった。アタッチメント安定型では成熟した防衛が有意に高く,アタッチメント不安定型では未熟な防衛が有意に高かった。成熟した防衛は,学力偏差値高群で優位に高く,未熟な防衛は学力偏差値低群で高かった。個々の防衛では,受動攻撃,分裂,合理化に学力偏差値の主効果が認められ,昇華に社会的経済的地位の主効果が認められた。成熟した防衛のユーモアはアタッチメント安定型で優位に高く,未熟な防衛の受動攻撃,隔離,価値下げ,自閉的空想,身体化はアタッチメント不安定型で高かったことが明らかになった。
6. .日中の眠気で学校生活のQOL低下がみられる高校生の実態―医学的睡眠検査から見えてきたこと― （査読付き）	単著	2021年	学校健康相談研究第18巻,第1号,P32～41	過度の日中の眠気を主訴とする健康相談を対象に,分析と考察を加えた。事例は,十分な睡眠時間をとっているにもかかわらず,眠気と頭痛を訴え,うつ伏せで休養する様子が観察されていた。睡眠専門医による睡眠検査（PSG,MSLT）,MRI,顎顔面・咽頭診察の結果,眠気の原因は,上気道抵抗症候群（UARS）および中枢性過眠症（ナルコレプシー,特発性過眠症）による覚醒水準の低下であった。さらに,上気道狭小化と肺胞低換気を基盤とするCO_2貯留の特異的所見が認められ,うつ伏せの事象に対しての医学的傍証が得られた。生徒は多様な症状を抱え,長期にわたって学校生活に困難が生じており,QOLの低下を招いていた。これらのことから,児童生徒に日中の眠気がある場合には,睡眠・覚醒障害を疑い,専門医で適切な評価を受けるよう導くことが重要であることが示された。

（紀要論文） 1. 近年増加するアレルギー性疾患について―正しい理解と援助のために―	単著	1991年3月	水戸第一高等学校紀要第29号, P56～63	保健室で行ったアレルギー性疾患を持つ生徒のケアを取り上げ, アレルギーの発生機序や様々な疾患について報告した。また, 定期健康診断や健康診断の予備調査として実施される保健調査の結果から, 疾病・異常の罹患率に含まれるアレルギー性疾患の保有率を示した。学校において様々な機会を捉えたにもかかわらず, すべてのアレルギー性疾患の把握は困難で, アレルギー性疾患が生徒の現代的な健康課題となっていることに言及した。
2. 保健だより再考―保健室で育てるからだの学力を考える―	単著	1994年3月	水戸第一高等学校紀要第32号, P38～71	保健だよりの作成と発行における, 筆者の健康教育観について報告した。学校教育における保健教育の位置付けと役割について言及し, 学習指導要領に照らして保健教育の教育課程上の問題点等を示した。保健だよりの作成にあたって, 内容の選定と構成方法を確認する資料を提示した。保健の学力は, 学力偏差値で評価できないことから, 言動に表出されたできばえとして捉え, 生徒や卒業生から得たフィードバックを提示した。
3. 保健室における健康科学の情報提供	単著	1997年3月	水戸第一高等学校紀要第35号, P51～67	医系・医療系大学の進学を希望する生徒の二次試験対策として, 医療の動向に関する情報の提示と資料化の検討を試みた。全国に設置された国立, 公立および私立大学のうち, 医学部, 歯学部, 薬学部, 看護学部の過去5年間の小論文の出題内容を予備校で出版する過去問題集から抽出した。資料作成にあたっては, 出題に含まれる頻出分野や用語を分類し, 参考文献を列挙したうえで内容を選定した。生徒にとって試験前に短時間で必要な情報を収集し準備が整えられるよう, 医療に関する用語を簡潔にまとめた資料として示した。
4. 精神分析を学ぶ	単著	2005年3月	水戸第一高等学校紀要第43号, P10～35	2003年から東京で週1回, 2年間におよび精神分析セミナーを受講した経緯と講義の一部を報告した。精神分析セミナーは, 1979年から開講し, 当時の慶應義塾大学医学部精神科の小此木啓吾, 皆川邦直と東海大学医学部精神科の岩崎徹也, 橋本雅雄が中心となり, 運営してきた。毎週火曜日の19時から21時まで, 年間33回の講義が設定され, 精神分析の理論や技法, 臨床場面での応用, フロイト以降の学派や発展的理論が取り上げられた。1年目のジュニアコース受講者の内訳は, 医師70人, 臨床心理士30人, 家庭裁判所調査官1人, 高校教諭1人, 養護教諭１人の103人でスタートし, 翌年のシニアコースに進んだ。「治療契約」「少年ハンス」「エリクソン　精神社会発達と自我同一性」「ビオン入門」「乳幼児精神医学 スターン理論を中心に」の講義内容を示した。

5. 水戸一高生のための「こころの参考書」作成にあたって	単著	2006年3月	水戸第一高等学校紀要第44号,P6～47	高校生の心理教育のための小冊子として執筆した「こころの参考書」の作成までの経緯を報告し,完成版を掲載した。まず,生徒指導部長の教員が教育的,生徒指導的な立場から報告した自殺とその対策について分析を加え,一方策として実施したカウンセリングの限界に関して考察した。そして,生徒理解の一助とするために,精神医学的観点と心理発達的観点に立つ思春期青年期の青年観と現代的な捉え方に関して報告した。これらを踏まえて作成したこころの参考書の位置付けは,健康的な学校生活を送るためのガイドブックとしたこと,内容構成は,高校生の発達課題を健康的・発達促進的な視点で論じた章編,精神不調を生じた場合の医療的な対処法に関する章編の2部編成としたことを報告した。
6. 学校管理下における高校生のけがの特徴と20年間の推移―事故防止の視点について― （査読付き）	共著	2010年	茨城大学教育実践研究29,P187～199	高等学校における学校管理下の事故1,020件を対象とし,分析を行った。災害発生は女子よりも男子が多く,教科体育と課外指導で多く発生していた。学校関係者が学校事故の際に説明責任を厳しく求められる昨今にあって,学校安全の認識と事故防止対策における体制整備の重要性について言及した。さらに,救急処置体制の確立と救急処置の力量を高める取り組み,現職教員の研修と教員養成段階で学校保健の必修化を図ること等,安全教育と安全管理の方策について報告した。 担当部分：全文執筆（海老澤恭子,大森智子,河田史宝）
7. 高等学校における食物依存性運動誘発アナフィラキシーの対応事例 （査読付き）	共著	2012年5月	茨城大学教育学部紀要61号,P229～236	救急処置事例のうち,食物依存性運動誘発アナフィラキシー（以下FDEIAnと記す）の疑いをもって養護教諭が対応した事例を対象とし,分析と検討を加えた。FDEIAnは症状が急速に進展することが病理の特徴であり,養護教諭のフィジカルアセスメントと救急処置によって,医療機関受診が迅速になされたことを報告した。いずれの事例もFDEIAnの確定診断がされず,誘発試験をしても原因食物の特定に至らなかった。これらのことから,養護教諭が行うフィジカルアセスメントのポイントと救急処置の要点を確認するとともに,学校関係者へのFDEIAnに関する啓発活動や救急医療機関との連携強化等の予防活動について提示した。 担当部分：全文執筆（海老澤恭子,廣原紀恵）

8. 養護教諭の行う健康相談の実際	共著	2013年2月	茨城県高等学校教育研究会養護部紀要第40号, P21～22	養護教諭が日常的に行う健康相談について, その意義を明らかにするとともに, 技法および力量形成に関する方途を検討した。事例検討会で提示する事例について, 項目別に詳述する事例分析シートの様式を試作し, 実際に使用して検討会を開催し評価を加えた。その結果, ジェノグラムで家族構成を図示し, 家族状況等, 事例の背景が把握しやすくなったこと, 具体的支援がシート上に反映されたこと, 養護教諭の支援が明確化されたこと等から, 研究の目的をおおむね達成できたことが報告された。 担当部分：全文執筆（田口裕美, 本橋紀子, 阿部みゆき, 小幡麻里, 海老澤恭子, 楜澤美和, 山口麻由子, 銭谷友季絵, 櫻井ひろみ）
9. 茨城の高校生の食生活	共著	2013年2月	茨城県高等学校教育研究会養護部紀要第40号, P43～52	茨城県の高校生を対象に, 質問紙によって食生活の実態を調査した。1986年に茨城県養護教諭会が中心となり実施した, 小・中・高等学校の食生活の実態調査との比較検討を行った。前調査と本調査で比較した項目は, 生活リズム, 朝食, 夕食, 間食, 夜食等で, 就寝時刻の後退等の結果が明らかになった。これらの結果をもとに, 養護教諭の実践可能な保健指導案を作成し, 集団指導の資料として報告した。 担当部分：P. 49～51 の保健指導を分担執筆（伊藤禎子, 海老澤恭子, 小野敏子, 勝間田蓉子, 菊池紀子, 佐藤典子, 田口裕美, 野口祐子, 塙智世, 宮田敬子, 本橋紀子）
10. 茨城の高校生の食生活2013	共著	2014年2月	茨城県高等学校教育研究会　高校生の食生活－実態と保健指導－, P1～59	2011年に茨城県の高校生の食生活の実態調査を実施した報告書である。調査内容は生活のリズム, 朝食や昼食等の食生活, ボディイメージやダイエットの有無等で, 2013年に結果の一部が報告されたが, それに加えて, すべての調査項目の結果が報告された。体格指数と痩せ願望, 運動習慣, ダイエット経験, 間食や夜食の摂取との関連について統計的検定を行い, 考察が加えられた。保健指導は, 養護教諭が1時間単位50分で実施した授業の指導案の7時間分が提示された。作成された資料も掲載され, 指導案とともに学校現場ですぐに活用できるよう示された。 担当部分：P. 34～54の構成, P. 50～51を執筆（伊藤禎子, 海老澤恭子, 小野敏子, 勝間田蓉子, 菊池紀子, 佐藤典子, 田口裕美, 野口祐子, 塙智世, 宮田敬子, 本橋紀子）

11. 健康相談の内容と特徴	単著	2018年3月	水戸第一高等学校紀要第56号,P45～55	学校保健会に投稿し,2011年に学会誌に掲載された「高等学校における健康相談事例のICD－10分類」の論文執筆過程で研究の方法上,除外したデータを復元して示し,考察を加えた。診断と主訴の関係を示す結果から,精神疾患においても身体不調を訴えていること,精神不調の訴えや対人関係の悩みを前景とした身体疾患が見いだされたことが明らかになった。このことから,精神的な悩みと身体不調は個々に分離される問題ではなく,総合的に捉えることが重要であることが報告された。さらに,相談は比較的短期間で解消することが保健室のニーズとされているが,長期におよぶ事例も約1割あり,すべてが医療機関を受診する医療群であったことから,高校生の時期が精神疾患の好発年齢にあたり,医療機関との連携が必要不可欠になることを示した。
12. 高校生の防衛機制	単著	2019年3月	水戸第一高等学校紀要第57号,P14～25	日本思春期青年期精神医学会に投稿し,2018年12月に学会誌に掲載された論文「高校生の防衛機制とアタッチメント―学力偏差値と保護者の社会的経済的地位との関連―」の執筆過程における文献研究について報告した。使用した防衛スタイルの心理尺度のうち,日本語版DSQ42尺度は,精神分析学の中核的理論である防衛機制を測定し,数量化して扱うため,追試再現を可能にする尺度であることについて示した。また,アタッチメント研究における理論の変遷や質問紙法による測定の変遷を報告し,アタッチメントスタイルは,Bartholomewの4カテゴリーモデルによる心理尺度を選択したことを報告した。
13. 養護教諭の行う健康相談―児童生徒の理解とその課題―	共著	2020年2月	茨城県高等学校教育研究会養護部紀要第47号,P17～23	健康相談の事例検討に関し,継続研究の結果を整理し報告した。事例検討会は,養護教諭の問題解決能力の向上を目的とし,学校で行う健康相談の特性から,関係機関の諸施設見学を併せて実施したことを報告した。事例検討会実施の際,研究的視点に基づいた事例分析シートを活用することによって,アセスメントの観点が明確になり,養護教諭の研究的態度が育成された。また,専門機関を訪問することによって,専門職から直接的に知識を得ることができ,フェイストゥフェイスの関係が構築できた体験から,実習的な要素を含んだ見学によって,関連機関との連携を学ぶことが可能になることが報告された。 担当部分：全文執筆（楜澤美和,萩庭麻里,高阿田彩織,桑原里香,本田蓉子,鎌田惠,疋田菜奈,鈴木由美,大畠菜々美,菊池悠希,海老澤恭子）

14. 高等学校における学校精神保健活動―こころの参考書（第3版）発行にあたって―	単著	2021年3月	水戸第一高等学校紀要第59号,P5～18	学校精神保健活動の一環として2001年に発行された「水戸一高生　こころの参考書」に加筆修正し,2020年に第3版として発行した実践活動について報告した。作成するにあたっての準拠する理論や基本的方針を報告し,こころの参考書の一部を抜粋して掲載した。また,2022年4月の高等学校学習指導要領の改訂に伴い,保健体育「現代社会と健康」の項目に,新たに健康課題の解決として「精神疾患の予防と回復」が盛り込まれたことを報告し,学校精神保健活動は生徒指導や保健指導のアプローチが必要不可欠であり,学校内外の関係者のネットワークと正しい知識を得ることで達成されることを言及した。
15. 学会誌投稿論文研究ノート	単著	2022年3月	水戸第一高等学校紀要第60号,P5～16	学校健康相談学会に投稿し,2021年12月に学会誌に掲載された論文「日中の眠気で学校生活のQOL低下がみられる高校生の実態 ―医学的睡眠検査から見えてきたこと―」の要旨,睡眠検査の実際,および,執筆にあたって検索した近接領域の文献を研究ノートとして報告した。終夜睡眠ポリグラフ検査（PSG）,反復睡眠潜時検査（MSLT）等の睡眠検査の概要や診察の目的とその他の検査項目について解説した。また,これまで大人の疾患とされてきた閉塞性睡眠時無呼吸障害は,児童生徒にとってもまれな疾患ではないことを報告した。これらは,アデノイドや扁桃肥大が原因となり,成長とともにアデノイドが消退し,自然治癒することがあり,子どもならではの病因と経過の特徴をもつ。しかし,この間放置されることによって成長障害や学習障害をもたらし,行動異常を併存し,その後の人生に大きな影響を及ぼす等,発育発達的観点からの問題について,先行研究を引用し報告した。
（辞書･翻訳書等）				
（報告書･会報等） ・ 先生のまなざし	単著	2023年12月	学校健康相談研究第20巻,第1号,P77	学会発足20年を記念して,これまで出会った先生方と職業生活を振り返った「会員の声」を投稿して掲載された。
（国際学会発表）				

（国内学会発表） 1. 思春期の危機　保護者の危機　養護教諭の危機	単独	2017年3月	日本学校健康相談学会第13回学術集会	神経性食思不振症は,多くが自意識の亢進する思春期に発病する危機的な疾患であり,家族を巻き込み,学校生活のQOL低下を招く。健康診断や健康観察で発見されることが多く,養護教諭はフィジカルアセスメントや学校生活の様子から,早期発見・早期治療に向けての予防的介入を行っている。一方で,この疾患は本人が病識を持ちにくく,本人のみならず保護者も治療抵抗を生じる場合があることを共有した。対応の困難な症例を提示し,学校管理下において常に適切な配慮を求められ,身体管理を担う養護教諭の職務の限界について,「思春期の危機　保護者の危機　養護教諭の危機」としたテーマで口頭発表を行った。（杏林大学　抄録P32～33）
2. 保健室の眠り姫と寝太郎さん	共同	2018年2月	第26回茨城県歯科医学会	「ここちよい眠りを求めて―世代を超えた睡眠障害への対処法」と題したシンポジウムにおいて,精神科医,養護教諭,歯科医,内科医,口腔外科医のそれぞれの視点からの話題提供をした。養護教諭の立場からは,「保健室の眠り姫と寝太郎さん」のテーマで,学校教育における保健教育の実際を紹介し,保健室で観察された睡眠覚醒障害を抱える生徒の実情を発表した。議論では,日中の覚醒水準の低下を訴えた生徒のなかに,歯科治療で症状が改善する例がある一方で,歯科矯正治療後に睡眠覚醒障害が憎悪した臨床例について検討された。 （土井永史,海老澤恭子,元開富士雄,長南達也,松尾朗：水戸市　抄録P45）
（その他） 1. 養護教諭の行う健康相談活動について	単著	2005年	茨城県養護教諭会すこやか38号,P34～36	茨城県高等学校教育研究会で発表した「養護教諭の行う健康相談活動」の研究成果を茨城県養護教諭会の会誌において紹介した。
2. 思春期の自立と親離れ	単著	2009年	茨城教育第819号,P40～41	中学生から高校生の発達課題である自立について,十分な依存によって自立が達成できることや大人の配慮すべき事項について解説した。
3. 学校で語りなおす	単著	2009年	新曜社,P222～227	「往復書簡　学校を語りなおす（伊藤哲司・山崎一希著）」のあとがきで,「学校で語りなおす」としたタイトルで二人の著者の紹介と書評を兼ね,学校現場からのメッセージを執筆した。
4. 北からのひとこと南からのひとこと	共著	2015年4月	日本学校保健研修社,「健」通巻511号,P3	教え子との往復書簡。養護教諭の職に就いた経緯,現在どのような思いで勤務をしているか等,往復書簡の形式で互いの思いを共有した。 （相川朋生,海老澤恭子）